

「つくばの地質」展示・説明会

齋藤 眞¹⁾・若松 二郎²⁾

1. はじめに

つくば市周辺ではつくばエクスプレス(秋葉原~つくば)の開業に伴って、駅周辺を中心にマンション、住宅地の開発、大規模ショッピングセンターの開業等、大きく変わりつつあります。しかし、住民やこれからつくばに生活の拠点を置こうとする人にとって、そのバックグラウンドとなるつくばの地質の実態はあまり理解されていません。地質に関わる我々にとっては、地元の地質をぜひ知って欲しいのですが、あまり良く知らないまま住んでいる方がほとんどでしょう。このため「地質の日」を契機に、地元つくば周辺に在住の方やつくばに住もうと考えている方に、ぜひつくばの地質について興味を持って欲しい、理解を深めて欲しいと考え、「つくばの地質」展示・説明会を企画しました。また、各地の博物館等を核に、異業種にわたる地質の専門家が結集して行事を行うという「地質の日」事業の趣旨にのっとり、研究機関(産総研地質調査総合センター)と、業界団体(茨城県地質調査業協会)が協力したパイロット的な行事と位置づけて行うことになりました。今回他地域に同様の行事がありませんでしたので、次回は他地域でも同様の行事ができると考え、紹介します。

2. 実行までの経緯

本企画は、イベントの準備としては遅れて始まりました。地質調査総合センター(GSJ)から3月に全国地質調査業協会および関東地質調査業協会を通じて、茨城県地質調査業協会に企画を提案しました。GSJ側の窓口であった齋藤と、茨城県地質調査業協会の若松をはじめとするメンバーとの協議が行えたのは、4月になってからでした。そこでようやく企画がまとまり、協力して行うことになりました。齋藤からは、「地質の日」共催の打診をしましたが、本年はGSJ主催、茨城県地質調査業協会協賛として行われることになりました。この際、来場者は、具体的な土地の詳細にコメントを求められるかもしれないが、後々責任問題になるようなことは言わないこと、地質に興味を持ってもら

うことを主眼とすること、が共通認識となりました。

ただし、GSJのメンバーには、つくばの地質を専門としているものは既にOBとなってしまっていていないことや、具体的な場所の地質について説明することに対し、「責任問題」を念頭に不安を訴える者が多く、また茨城県地質調査業協会側もつくば周辺の地質の発達史についての知識を深めたいという希望がありましたので、4月22日に「筑波研究学園都市環境地質図」の著者の一人である磯部一洋博士(元GSJ)に、つくばの地質の解説をしていただき、また展示についてのご助言も頂いて準備を整えました。

3. 展示物

この行事の中心展示物は、「筑波研究学園都市環境地質図」の200%拡大床貼り地質図でした。断面図も同様に拡大して床貼りにしたので、ロビーの1/4を占める大きな展示物になりました(写真1)。地質図の床貼りは、これまで地質情報展などでも、来場者に「どこから来たの?」と声をかけるための必須アイテムでしたが、今回は主展示物でもあります。地質図で地層の説明をするためには、地質図の周りにしばしば本物の岩石を置きますが、つくばでは表層は柔らかい地層やロームでできているので、職員の住宅建設予定地(つくば市荻間)で簡易ボーリングを行って、表層の地層を取ってきて、触れるようにしました。得られたのは常総層の粘土(“常総粘土”)と砂(写真2)で、つくばの表層の地層のうち典型的なものを展示することができました。また、産総研の地震観測井を掘ったときの地下200m付近の貝化石を含む地層(海成層)と600m付近の古第三紀初頭の花崗岩のボーリングコアを、地下深くの地質を見もらうために展示しました。これらの解説は産総研の本部情報棟を作った際の地質調査結果やTXつくば駅が地下のどの地層のところで作られたかを説明したパネル「身近な地下の様子」として展示しました。また、住宅の地質を調べるときによく使われる「スウェーデン式サウンディングマシン」は、入り口脇に展示されました(実際に掘るところがなかったのが残念)。

キーワード:「地質の日」、つくばの地質、「筑波研究学園都市環境地質図」、アンケート結果

1) 産総研 地質情報研究部門

2) 茨城県 地質調査業協会、(株)土浦ジステック



写真1 会場風景。

4. 来場者の反応

当日の天気はやや悪かったものの、朝から来場者があり、この目的のためにおいでになった方もおられました。来場者数は281名、アンケート結果を見ると、大人が3/4を占め、市内が半数強でした。

アンケートを書いてくださった(よく見ていただいた方々)のコメントを見ると、来場した動機として、「土地に対して興味があった」、「つくば市内で住宅建築を検討中、どこが良いか知りたかった」という意見や、感想として「役立った」、「とても興味深かった」、「今まであまり考えたことがなかった、自宅の下がどうなっているのかわかり安心した」、「畑作に参考となった」、「知識の増大になった」、「台地の上なので比較的地盤がよいことがわかった」という全般的に肯定的な意見が聞かれました。その他に「筑波山が火山ではないと初めて知り、本当に安心しました」という意見もありました。

このイベントをどこで知ったかという問いに対しては、webが1/4であったのに対し、フリーペーパー(常陽リビング)が1/3と多く、能動的に情報を得ないといけないwebよりも、新聞に折り込みで入ってくるフリーペーパーの効果が大きいことがわかりました。

5. 次回に向けて

来場者の評価や、「地質の日」の趣旨(場所のあるところに、専門家が集まって行う)から、この企画は初年度としてはよかったと思います。次回は共催で行えたらと思います。

特定地域の地盤地質に関する質問を受け、それに対する専門家の意見を提供するケースにおける責任問題を心配した方もGSJ側にいましたが、対応に当たった方が心得ていて、問題になるような質問と対応



写真2 つくば市内で採取した簡易ボーリングのコア。定規は1m。数字は深さ。層相は0～1.1m:土壌, 1.1～3.1m:粘土, 3.1～3.4m:シルト, 3.4～5.0m:砂。

はありませんでした。また、つくばの地質に詳しい人は限られていましたが、事前の勉強会も行ったため対応できました。建築、井戸掘り等の際の地質の関与の仕方についての話は地質調査業協会の方の説明が興味深く、うまく分担できたと思います。地質は地域特性のある情報ですので、地元の地質を知るといイベントはその普及には最も適していると思われます。また、現実の地層を展示するためのボーリングの展示はとても好評だったので、次回行うときもボーリング、地層のはぎ取り等検討したら良いと思います。

また、準備期間が多くとれませんでしたので、広報活動はwebと地元のフリーペーパー(常陽リビング:不動産関係の広告が多い)しかできませんでした。地質の日全体の広報に関係して、「地層のはぎ取りがあれば、その様子を生中継で取材したい」とのマスコミからの依頼がありましたので検討しましたが、対応できず残念でした。その割には、多くの方に来ていただいたと思います。

このような企画は、「地質の日」事業と同様、毎年継続的に続けていくことが、一般社会に対して、アピールしていく重要な手段であると考えます。2009年は各地で同様の企画が行われることを期待したいと思います。

謝辞:本事業を行うために、「筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図」の著者の一人である磯部一洋博士には地質の解説をしていただきました。また、首都圏新都市鉄道株式会社技術部施設課の岩本 博氏には、つくば駅の概要と地質についての資料をご提供いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

SAITO Makoto and WAKAMATSU Jiro (2009): Exhibition of "Geology of Tsukuba".

<受付:2008年8月29日>